

攷注あとがき

傷寒論攷注三十卷（傷寒論陰陽易差勞復病篇）あとがき

慶応四年戊辰二月十八日、雪後雨中書于華佗術之温知^{温故知新}藥室、森立之岐翁

此書起業于慶応元乙丑年四月、今茲至戊辰二月、中間凡三年、退食刀圭奔走餘間、夜以繼日、遂得脱稿矣、余五十年来精神之所專注、唯在此三十卷中、如其家說秘訣、其理幻妙幽微、蓋非其人則叵傳、仲景以後已心傳心之至意、久失其傳、注家皆就文字上而解説、但是升堂而未入室*之徒耳、今看破其偏陋、而歸於臨症實詣之地、則仲景之書可始読而可始施用于今日也、

六十二翁立之再録

^{訓詁}此書は慶応元乙丑年四月に業^学びのわざを起し、今茲^ここ戊辰二月に至る、中間凡三年、退食^{公職が終わってから}刀圭^{薬を盛るさじ}・医術^{奔走}尽力・ありったけの力をつくすの餘間^{餘閑}、夜以て繼日^{日夜}、遂に脱稿を得る矣、余五十年来精神の専ら注ぐところ、唯此三十卷中に在り、其家^{流派}説の秘訣^秘密^{の法}の如きは、其理幻妙幽微^{ユウビ・奥深くかすかで見たいこと}、蓋し其人^{すぐれた人物}に非ざれば則ち傳うべからず、仲景以後已^以心傳心の至意^{深い意味}、久しく其傳を失う、注家皆文字上に就^{とどま}りて解説す、但是堂に升^{のぼ}りて未だ室に入らず*の徒耳、今其偏陋^{ヘンロウ・知識がせまい}を看破して症^{病氣の徴候・病氣}に臨み實^{まこと}の詣^{深いところ}に達するの地に帰れば、則ち仲景の書読み始める可きにして今日に施用始める可べき也、

六十二翁立之再録

*論語先進篇「子曰、由也升堂矣、未入於室也」 子路の学問は殿上にのぼっている。しかし、まだ廊下において部屋にもう一步入っていない。貝塚茂樹訳注「論語」

傷寒論攷注三十四卷（弁發汗吐下後病篇・補經）あとがき

慶応四戊辰年三月廿三日（4.15）書于作樂書屋、近日官軍諸卒已入都下、四隣寂寥、細雨蒙昧、満目春色却覚如秋色、噫、
華一翁森立之

*参考

慶応四年（明治元年）二月七日医学館での森立之傷寒論講義が少陰病篇で中断、以後医学館のすべての講義は休講となる

同年二月十二日 徳川慶喜江戸城を出る

同年四月十一日 江戸城開城

同年五月十五日 彰義隊官軍上野で戦闘

攷注あとがき完 2009/04/27